

近世岡山の農業遺構の特徴 Profile of Agricultural Heritage in the Edo Period

馬場俊介
Shunsuke BABA

1. **はじめに** 「岡山藩」とせず「近世岡山」としたのは、現在県下に残る重要な農業遺構のすべてが、必ずしも岡山藩の関与でできたものとは言えないからである。それらを時代的に見ていくと、江戸初期、津田永忠によるもの、江戸後期の3期に分かれるので、以下この分類に従って概略を記すことにする。

2. **江戸初期** 岡山での江戸初期の農業開発の担い手は、戦国武将・池田輝政直系の池田忠雄であり、岡山藩主として新田開発に努めたことが各種史料により裏付けられている。藩主だった年代は慶長 20～寛永 9

(1615-32) 年であるが、12-29 歳という年齢から実際には寛永年間が主体だったと思われる。現存する全国最大の石造取水堰である建部井堰 (全長 600m 以上) は、建造にかかわる史料が全く存在しないが、各種の記録から寛永 5～9 (1628-32) 年頃に造られた可能性が最も高いと推定される。そこで、ここでは池田忠雄が関与した最大の農業遺構として紹介する。



建部井堰 (Takebe diversion weir)

3. **津田永忠** 津田永忠は、近世の日本の代表する 4 人の土木巧者の 1 人である。4 人とは、活躍した時代順に加藤清正 (熊本 25 万石領主、1562-1611)、成富兵庫 (佐賀藩家老、1560-1634)、野中兼山 (土佐藩筆頭家老、1615-64)、津田永忠 (岡山藩郡代、1640-1707) で、代表的な農業遺構を 1 件ずつあげると、それぞれ、馬場楠井手の鼻ぐり、馬ノ頭伏越、麻生堰、



田原用水の旧懸樋 (Tahara-yosui aqueduct)

田原用水の旧懸樋となるであろうか。4 人の中で、一番地位の低いのが津田永忠であったが、上記の池田忠雄の突然の死後、鳥取藩主から岡山藩主となった池田宗家としては

初代藩主となる池田光政の庇護の元で、国指定特別名勝の後樂園、国指定特別史跡・重要文化財の閑谷学校、日本最古の運河閘門である吉井水門、全国最大の石桁水路橋である県指定重要文化財の田原用水の旧懸樋、洪水防御のための百間川一ノ荒手と二ノ荒手（県指定史跡）、全国で唯一現存する“孟子が理想とした”年貢のあり方を実践した友延新田の「井田」遺構、全国で最大・最古級の大多府港の元禄防波堤（国有形登録文化財）、江戸期最大の沖新田と、それを可能にした全国初の河口部の遊水地「大水尾」など多様・多彩で秀逸な「名作」を築いていった。

4. **江戸後期** 江戸後期の代表的な農業開発が興除新田の干拓である。備中国の海岸の地先に備前国の干拓地を造成するという思い切った案は、津田永忠の時代のものからとされているが、実現したのは百年以上も経ってからで、その間、岡山藩 32 万石と児島湾沿岸の 4 ヶ村との間の係争は複雑な経緯を辿り、最終的に藩が幕府に備中領分の同高の替地に相当する年貢を銀納することで決着した。自国内の干拓と異なり藩の財政にはあまり寄与しなかったが、明治期の児島湾干拓の端緒となったという歴史意義と、典型的な岡山式干拓樋門である内尾大水門を生んだ点で重要である。

5. **結論** 岡山の特徴を材料の面から見ると、干拓地に近接した海辺で大量に産出した良質の花崗岩の影響が大きい。日本で入手できる中では最も強度の高い石材である花崗岩を、梁の形で用いることのできた岡山では、農業施設に多くの花崗岩が使われ、それが独自の“力強い”印象の農業遺構群を生み出していった。その代表が、田原用水の旧懸樋であり、内尾大水門であった。



友延新田の井田 (Tomonobu-shinden seiden)



大水尾 (Oomio water storage)



内尾大水門 (Uchio reclamation gate)